

日蓮大聖人御書全集

みよういちあまごぜんごしようそく

妙一尼御前御消息

ふゆ

かなら

はる

こと

（冬は必ず春となるの事）

みよういちあまごぜんごしようにそく

ふゆ

かなら

はる

こと

妙一尼御前御消息（冬は必ず春となるの事）

けんじがんねん

がつ

さい

みよういちあま

建治元年（'75）

5月

54歳

妙一尼

みよういちあまごぜん

妙一尼御前

にちれん

日蓮

そ

てん

つき

ひ

そうもく

しょう

ひと

夫れ、天に月なく日なくば、草木いかでか生ずべき。人

ふぼ

ひとり

欠

しそくとう

育

うえ

に父母あり。一人もかけば、子息等そだちがたし。その上、

かこ

しょうりよう

びようし

おなご

過去の聖霊は、あるいは病子あり、あるいは女子あり。

留

置

はは

誰

言

預

とどめおく母もかいがいしからず。たれにいいあずけてか

めいど

赴

たま

冥途におもむき給いけん。

だいかくせそん

ごねはん

とき

歎

宣

われねはん

大覺世尊、御涅槃の時、なげいてのたまわく「我涅槃す

こころ

あじやせおう

かしようどうじぼさつ

べし。ただ心にかかることは阿闍世王のみ」。迦葉童子菩薩、

ほとけ

もう

ほとけ

びようどう

じひ

いつさいしゅじよう

仏に申さく「仏は平等の慈悲なり。一切衆生のために

命

お

たも

搔

分

あじやせおうひとり

いのちを惜しみ給うべし。いかにかきわけて阿闍世王一人

仰

と

ごへんじ

とおおせあるやらん」と問いまいらせしかば、その御返事に

のため

たと

ひとり

しちしあ

しちし

なか

いっし

云わく「譬えば、一人にして七子有り。この七子の中に一子

やまい

あ

ふぼ

こころびようどう

病に遇えり。父母の心平等ならざるにはあらざれども、

びようし

こころすなわ

おお

とううんぬん

しかも病子において心則ちひとえに多きがごとし」等云々。

てんだい

まかしかん

きようもん

しやく

い

たと

しちし

天台、摩訶止観にこの経文を釈して云わく「譬えば、七子

ふ ぼ びようどう

びようしや

の父母平等ならざるにはあらざれども、しかも病者にお

こころすなわ

おも

とううんぬん

ほとけ

こた

いて心則ちひとえに重きがごとし』等云々ところそ仏は答

たま

もん

こころ

ひと

数

多

こ

えさせ給いしか」。文の心は、人にはあまたの子あれども、

ふ ぼ

こころ

やまい

こ

父母の心は病する子にありとなり。

ほとけ

おん

いっさいしゅじよう

みな

こ

うち

つみ

仏の御ためには一切衆生は皆、子なり。その中、罪ふ

せけん

ふ ぼ

ぶつきよう

敵

もの

かくして、世間の父母をころし、仏経のかたきとなる者は、

びようし

病子のごとし。

あじやせおう

まかだいこく

しゅ

わ

だいだんな

しかるに、阿闍世王は摩竭提国の主なり。我が大檀那た

びんばしやらおう

わ

敵

てん

捨

りし頻婆舍羅王をころし、我がてきとなりしかば、天もすて

にちがつ　へん出

ち　いただ

震

ばんみん

ぶつぼう

て日月に變いで、地も頂かじとふるい、万民みな仏法に

背

たこく

まかつこく

責

あくにん

そむき、他国より摩竭国をせむ。これらはひとえに悪人・

だいばだった　し

けつく

きよう

あくそうみ

い

提婆達多を師とせるゆえなり。結句は、今日より悪瘡身に出

さんがつ

なのか

むけんじごく

お

悲

でて、三月の七日、無間地獄に墮つべし。これがかなしけ

われねはん

こころ

掛

われ

あじやせおう

れば、我涅槃せんこと心にかかるといふなり。我、阿闍世王

救

いっさい

ざいにん

あじやせおう

歎

たま

をすくいなば、一切の罪人、阿闍世王のごとしとなげかせ給

いき。

しょうりよう

びようし

おなご

しかるに、聖靈は、あるいは病子あり、あるいは女子あ

捨

めいど

枯

く

き

り。われすてて冥途にゆきなば、かれたる朽ち木のような

年 寄 あま ひとり 留

るとしより尼が一人とどまりて、この子どもをいかに心

苦 歎

ぐるしかるらんなげかれぬらんとおぼゆ。

こころ

にちれん

こころ

掛

かの心のかたがたには、また日蓮がこと心にかからせ

たま

ふつこ 虚

ほけきよう 広

たま

給いけん。「仏語むなしからざれば、法華経ひろまらせ給う

ごぼう

べし。それについては、この御房はいかなることもありて、

たま

思

言

いみじくならせ給うべし」とおぼしつらんに、いうかいな

流 う

ほけきよう

じゅうらせつ

くながし失せしかば、「いかにや、いかにや。法華経・十羅刹

思

永

たま

は」とこそおもわれけんに、いままでだにもながらえ給い

にちれん

許

そうら

とき

よろこ

たま

たりしかば、日蓮がゆりて候いし時、いかに悦ばせ給わ

言

虚

だいもうこく

寄

ん。また、いいしことむなしからずして、大蒙古国もよせ

こくど

危

そうら

よろこ

たま

て国土もあやおしげになりて候えば、いかに悦び給わん。

ぼんぷ

こころ

これは凡夫の心なり。

ほけきよう

しん

ひと

ふゆ

ふゆ

かなら

はる

法華經を信ずる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。い

むかし

聞

見

ふゆ

あき

返

聞

まだ昔よりきかずみず、冬の秋とかえられることを。いまだき

ほけきよう

しん

ひと

ぼんぷ

きようもん

かず、法華經を信ずる人の凡夫となることを。經文には「も

ほう

き

ひと

じようぶつ

し法を聞くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」

説

そうろう

ととかれて候。

こしようにう

ほけきよう

いのち

捨

故聖靈は法華經に命をすてておわしき。わずかの

しんみよう

支

ほけきよう

召

いのち

身命をささえしところを法華經のゆえにめされしは、命

捨

か

せつせんだうじ

はんげ

み

捨

をすつるにあらずや。彼の雪山童子の半偈のために身をす

やくおうぼさつ

ひじ

焼

たま

かれ

しようにん

ひ

みず

て、薬王菩薩の臂をやき給いしは、彼は聖人なり、火に水

い

ぼんぷ

かみ

ひ

い

を入るるがごとし。これは凡夫なり、紙を火に入るるがご

とし。

あん

しようりよう

くどく

だいげつりん

これをもつて案ずるに、聖靈はこの功德あり。大月輪の

なか

だいにちりん

なか

てんきよう

さいし

み

う

中か、大日輪の中か、天鏡をもつて妻子の身を浮かべて

じゅうにとき

一 覧

さいし

ぼんぷ

十二時に御らんあるらん。たとい、妻子は凡夫なれば、これ

見

聞

たと

みみ

癡

もの

いかずち

こえ

聞

をみずきかず。譬えば、耳しいたる者の雷の声をきかず、

め 潰

もの にちりん み

おんうたが

目つぶれたる者の日輪を見ざるがごとし。御疑いあるべか

さだ おん 守

たも うえ

おん

らず。定めて御まぼりとならせ給うらん。その上、さこそ御

渡

わたりあるらめ。

ちから

訪

思

ころも ひと

力あらばといまいらせんとおもうところに、衣を一つ

た 条 ぞんがい しだい

ほけきよう

おんきよう

給ぶじよう、存外の次第なり。法華経はいみじき御経にて

こんじよう

気

み

そうら

あま

おわすれば、もし今生にいきある身ともなり候いなば、尼

御 前 い

くさ 陰

ご

ごぜんの生きてもおわしませ、もしは草のかげにても御

覧

幼

公

達

とう

顧

らんあれ、おさなききんだち等をばかえりみたてまつるべ

し。

佐 渡 くに もう

もう げにんひとり付

そうろう

さどの国と申し、これと申し、下人一人つけられて候は、

よ 忘 そうろう

おん

仕

いつの世にかわすれ候べき。この恩は、かえりてつかえた

そうろう

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

きようきよう

てまつり候べし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々

きんげん

謹言。

ごがつ にち

五月 日

にちれん

かおう

日蓮

花押

みよういちあまごぜん

妙一尼御前